





Handwritten Japanese text on aged paper, likely a page from a sutra or religious manuscript. The text is written in cursive and includes phrases such as "南無阿弥陀仏" (Namu Amida Butsu) and "南無釈迦牟尼" (Namu Shaka牟尼). There are also some marginal notes and a small diagram-like structure on the left side.



Handwritten text on the right page, including a large heading at the top and several lines of vertical script. The text is partially obscured by a large, dark ink blot or stain in the center.

Handwritten text on the left page, consisting of several vertical columns of Japanese characters. The text is written in a cursive style and includes various characters and symbols.

世にまひては 子いふやるる事
乃の 早 何事かしては 子 是れ物

相を能く見んも 世の母かして
此とそれかたしとて 乃の極かして
ては 早 是の世の事かして

そと作は物かして 世ははかして
此とて 乃の事かして 乃の事かして
乃の事かして 乃の事かして

乃の事かして 乃の事かして
乃の事かして 乃の事かして
乃の事かして 乃の事かして

乃の事かして 乃の事かして
乃の事かして 乃の事かして
乃の事かして 乃の事かして

乃の事かして 乃の事かして
乃の事かして 乃の事かして
乃の事かして 乃の事かして

乃の事かして 乃の事かして
乃の事かして 乃の事かして
乃の事かして 乃の事かして

乃の事かして 乃の事かして
乃の事かして 乃の事かして
乃の事かして 乃の事かして

乃の事かして 乃の事かして
乃の事かして 乃の事かして
乃の事かして 乃の事かして

乃の事かして 乃の事かして
乃の事かして 乃の事かして
乃の事かして 乃の事かして

一、二、三、
上、
かやあの手ひの袖
わまれの履いのふありり実屋
惟をいづくそととめぬ夜と

まぬ時たはををかしけ世はそと
りくた程をわ 五年恒陰り

四、
解り鳥雀枝の伊よ集家
実世中いわ波のうらいつく雲

水た身乃をいふかられり格志
霧はたまよ 一か二年月と送り

一か 一も二世くをい中ひ
焚うあ末のたうと陰ひととめぬ

三、
あてまればふ別とと成果て
以月の枕一と波れ 日 春さうか
まの焚うより物や 奈良路分四

栢も二たけてそふと角もと倭人
乃かき流の源とそ袖の志うら

流かたよとひくくする年波は流
あ、月乃影と一きぬれと寺の柳

く葉みたり子れ白後白流れゆふ
かきそい川ちとととと失り

りりてかかぬあう葉末は流
色は紙よりあうの物とととと

三、
ゆりまは山とがれ川とらわたり
て山味よ丹の里まあふ名のと

一、
して氣らる面けりさうさ
あかりまのわくても月月と送海

一、
身の羊れあも隙の物ととと
て仍程よ都のありとととと

後得神の寺よき事なり
りきと眺むハヤハ花乃存未れ
鬼の事 雲よなるゆ大丹川
まはる小島世のけりなむや感む
り山梅嵐たけせね尾小倉名
里乃夕霞立しうけあそと神
わすしおけと花衣まゆ解集と
あけものほそるさうりもりも
ふりも唯け寺そふ秘さかつけ
あくとかか所身よハ世もまけ
まはる二佛乃中男秋くそ記れま
ひまなるあそふめんあしとそ昆
首錫摩う偈りし赤梅檀れも
雲をそ祈力を現して天竺震
且我朝三小よわらむ秘くも此
寺よ現し流るる安住れ法
くりら上 西母麻子那夫人れ巻結
乃いああまて佛と山母さか
ひ結ふたそり院人あるあう
てかろら母とゆまわらふ秘
と身とそらんかんてそ祈り
まはる親子あひれ神かあ百あ
か舞と足後へ けらわら子
しんカカリは結かあ人志中か
かまわらう子乃あ記解んあわ
子あしわ親子たなあふ 南
加年尼佛とねんあうと子あ
やわらう信んああ記と南

村の由。山ありとて。此の神。又。海
に。宿。務。を。確。立。す。り。作。ら。し。て。教。導
す。り。と。ま。り。し。り。詞。意。は。神。の。是。に

も。右。の。指。標。よ。り。し。り。何。の。由。こ。ま
し。る。人。一。人。の。所。在。を。し。り。分。か。り。身
屋。と。和。し。み。い。ふ。お。な。を。て。業。同。や

中。出。し。し。り。あ。り。し。り。か。く。准。る。所。入。作
態。余。も。あ。り。し。り。師。の。事。も。あ。り。し。り。由
それ。く。し。り。し。り。小。を。希。く。し。り

人。ま。り。し。り。あ。り。し。り。と。何。人。ま。り。し。り
や。も。い。し。り。あ。り。し。り。と。ま。り。し。り。師。の
事。り。し。り。し。り。小。を。希。く。し。り。あ。り。し。り

し。り。し。り。あ。り。し。り。と。何。人。ま。り。し。り
久。在。何。と。し。り。あ。り。し。り。と。ま。り。し。り。師。の
事。り。し。り。し。り。小。を。希。く。し。り。あ。り。し。り

何。と。し。り。あ。り。し。り。と。ま。り。し。り。師。の
く。と。し。り。あ。り。し。り。と。ま。り。し。り。師。の
久。在。何。と。し。り。あ。り。し。り。と。ま。り。し。り。師。の

久。在。何。と。し。り。あ。り。し。り。と。ま。り。し。り。師。の
事。り。し。り。し。り。小。を。希。く。し。り。あ。り。し。り
何。と。し。り。あ。り。し。り。と。ま。り。し。り。師。の

何。と。し。り。あ。り。し。り。と。ま。り。し。り。師。の
く。と。し。り。あ。り。し。り。と。ま。り。し。り。師。の
久。在。何。と。し。り。あ。り。し。り。と。ま。り。し。り。師。の

久。在。何。と。し。り。あ。り。し。り。と。ま。り。し。り。師。の
事。り。し。り。し。り。小。を。希。く。し。り。あ。り。し。り
何。と。し。り。あ。り。し。り。と。ま。り。し。り。師。の

何。と。し。り。あ。り。し。り。と。ま。り。し。り。師。の
く。と。し。り。あ。り。し。り。と。ま。り。し。り。師。の
久。在。何。と。し。り。あ。り。し。り。と。ま。り。し。り。師。の

一 尸して懸んとみかて涙を付サ上
一 一も家給りおろしよいふあり来り
一 一室ひし委終りたりををを
一 一はさひて懸るひ 甲
一 一中事と見末あり
一 一上人と見るとおの沖をさしあり
一 一上
一 一あまそそほち我は名跡の
一 一世小ういふ人言 山理ありと思
一 一を歌などそめたりし
一 一は流のへき 一も屋敷ても甲斐
一 一と世そしとんをチ 取見とみる
一 一よといひ海の世をわたり かい
一 一と取見と人言をひききとん

一 一と何申せい ^{サレ} 一とく又津糸
一 一痛うはを給ひ初めくそし
一 一あり給ふんまうらのか ^上 一唯
一 一と合原を給へ ⁺ 一とを海りて出
一 一兄弟の擲交り人言とひし
一 一仍り給うわとありま ⁺ 一と
一 一ゆらよえらま ⁺ 一とを出る
一 一後つとあ ⁺ 一と三年のうらみ
一 一侍へ ⁺ 一極の取見と出候し
一 一此心と付 ⁺ 一おろしとあり
一 一又の ⁺ 一おれん ⁺ 一又り
一 一名跡よ ⁺ 一みねの ⁺ 一お ⁺ 一み ⁺ 一あり ⁺ 一と ⁺ 一より ⁺ 一ち
一 一又 ⁺ 一割 ⁺ 一ま ⁺ 一い ⁺ 一う ⁺ 一を ⁺ 一さ ⁺ 一ひ ⁺ 一の ⁺ 一紙 ⁺ 一の
一 一お ⁺ 一ち ⁺ 一も ⁺ 一身 ⁺ 一れ ⁺ 一な ⁺ 一し ⁺ 一や ⁺ 一伊 ⁺ 一と ⁺ 一わ ⁺ 一か ⁺ 一母 ⁺ 一よ

三
あきとしそむひとそふんのおかゆし
けりあしり我の居る時を恨むか
わともさるとそはまのよけの安穩
よほの縁の縁の外佛とゆふも
なまけりく 僧 是の信濃の寺を

あま米堂乃知あくとくしよまよま
けりあしり我の居る時を恨むか
わともさるとそはまのよけの安穩
よほの縁の縁の外佛とゆふも
なまけりく 僧 是の信濃の寺を
あま米堂乃知あくとくしよまよま
けりあしり我の居る時を恨むか
わともさるとそはまのよけの安穩
よほの縁の縁の外佛とゆふも
なまけりく 僧 是の信濃の寺を
あま米堂乃知あくとくしよまよま
けりあしり我の居る時を恨むか
わともさるとそはまのよけの安穩
よほの縁の縁の外佛とゆふも
なまけりく 僧 是の信濃の寺を

あま米堂乃知あくとくしよまよま
けりあしり我の居る時を恨むか
わともさるとそはまのよけの安穩
よほの縁の縁の外佛とゆふも
なまけりく 僧 是の信濃の寺を
あま米堂乃知あくとくしよまよま
けりあしり我の居る時を恨むか
わともさるとそはまのよけの安穩
よほの縁の縁の外佛とゆふも
なまけりく 僧 是の信濃の寺を
あま米堂乃知あくとくしよまよま
けりあしり我の居る時を恨むか
わともさるとそはまのよけの安穩
よほの縁の縁の外佛とゆふも
なまけりく 僧 是の信濃の寺を

寺の僧の甲はたよりを我より多くて我
を誹りて里を極くふりてありて
世のふりてはれ里とるやまをいづく
らの僧もあつた種とてあつたをいづく
相もたつて井とて山とてあつた
てあつたをいづくをいづくに誹りて
来りてれれはたつてとてあつたてが
しあつた守りたりていづく

ありて女家の内陣ありてとて女
乃身よりて叶ぬ
とてあつた身とてあつた内
人を他方便唯稱縁縁得生極希
とてあつた取也
れりあつたはれれ乃身とてあつた

乃正誓のゆきわくをわく
師よりす耐はは長光寺の
内陣より極く乃九原上生
真ありて女をいづく
の法制戒とてあつたをいづく

色々のよりて何とてあつたをいづく
ありてあつた南無阿彌陀佛
かやくヤ
八守りてあつたをいづく
はをいづくをいづく
まをいづくをいづく
あつたをいづくをいづく
むね念ひをいづく

芝乃露の基よ此若雨 惟ふと

かき縁乃道 是も其又世れ夢の

名 ちや曲下 少い名後眼よさるり品

ひの極物よらほしく是と安未と

小三累よ流情して於人乃れ其極の

晴く其雲の端を月乃みろ多危明

らきたま如半等れ其よいじ

さゆも秋もして於惚乃さるふじ

とけまぬそむしき飛傳乃さる

くせ花乃あしういふ

せふば身とうへんと其をさる

人乃らんぞ三口は言三れ十乃そ

る レテ上 三累唯一心外を別法ん佛及れ生

とす時乃三三累別かよ難人の

は ちや ちや己身れ其後や未唯んれ佛か

は ちや ちやくのちぬかしくけ其乃池の基

れ ちや ちやんあも其をさるるちや

くら ちや ちやわをれじちやと力まらぬ

を ちや ちやれ考よあるへし柿たのしひ

ち ちや ちやじまる教へ教よよも

極 ちや ちやの果あもや其れ池よ其功徳地

乃 ちや ちや後乃其極其のむえ

長 ちや ちやくのまをれしと極め

者 ちや ちやの佛なるへし其れ我成仏十方

乃 ちや ちや世界なるへし ミテ上 其れ其

書 ちや ちやれ白雲と白雲れ其かひく

のそのほまよひにひびけりゆきの
 えんがかしをきこむるはつてふと
 稱名を尋ふゆきと懐かきて灯の
 影をたもとて作くありや南をぬか
 深はるゆきひとけしはつてふ今を
 何とけしむいふをさとてふまひあ
 とらふをさしてはゆきをちりて
 とまげのゆきあえぬをきかして
 ひとひりのゆきそそくをきかして
 and the way is the way of the way
 幾乃 三五 かしめありぬゆきとわかれ
 母の姿とらふを 三五 ねんとひ
 暮人としひたかひのあまをてふま
 けはゆきかきかきかきかきかきか
 中宿帯木はつりとはんてあまぬ
 とらふをさしてはゆきをちりて
 ひとひりのゆきそそくをきかして
 とらふをさしてはゆきをちりて
 ひとひりのゆきそそくをきかして

三井寺

和南を念ふ慈大虫乃歎世をうへ
 ひとひりのゆきそそくをきかして

五社屋の御下向

七社屋の御下向

と云々

わしたよ

五社屋の御下向

三井寺

御下向

御下向

御下向

御下向

御下向

御下向

御下向

御下向

御下向

御下向

御下向

御下向

御下向

御下向

御下向

御下向

御下向

御下向

御下向

何う有難のう... されぬふふお

アウかあまとも我い物よりすお

も秋あうう現ありあれおれや喜れ

たよと秋子の別まよお物よゆらや

人友親としていゆうかーと音

はるみれの味よとまうおれ

ら屋らうらんカケり秋の秋と秋と

六 月あぬまよすああ人あ

すも人のまうらぬうと紅葉も

月も若も鳥よ我子れああうう

すもあうゆいさあより屋らん

はゆらうとふゆらん久すははは

賞夜傍の二松んらり子れたひあ

八松風事らん松風地たはり

揺うくまのうを園の屋とともや

く秋まう風とさうした秋れあ

三井ちあまよまきり三井寺あ

まよらり 早上 桂いみのうらう

名もた月あくうまで庭の末は

なとてんハ 上 杉ーと今あるこ

又春一乃彩月のえ二子星れあ

松んえんあは面は照月あま

是は秋も中岸あもすあうう

白屋 月あ風と時あははれ海

くはとあははのあえんして海

かるとあまじふ秋あこと月あ

後山やましあまのううあ

あふんあくと月のらそりあ

新とあらまておん新入と云ふ
侍らん かく初白の清の絲や

わらきまへんまの清き春の絲を
まをわらう 毛のきよき雪を
清はわらまといふおゆの糸を
糸の清きまるとおん人の糸を

糸でつるし清のまの糸女を
糸のまをまてまをまをまを
まあり糸のまをまをまを
月を清はわらぬん 糸の清は

糸の清はわらぬん 糸の清は
糸の清はわらぬん 糸の清は
糸の清はわらぬん 糸の清は
糸の清はわらぬん 糸の清は

糸の清はわらぬん 糸の清は

糸の清はわらぬん 糸の清は
糸の清はわらぬん 糸の清は
糸の清はわらぬん 糸の清は
糸の清はわらぬん 糸の清は

糸の清はわらぬん 糸の清は
糸の清はわらぬん 糸の清は
糸の清はわらぬん 糸の清は
糸の清はわらぬん 糸の清は

糸の清はわらぬん 糸の清は
糸の清はわらぬん 糸の清は
糸の清はわらぬん 糸の清は
糸の清はわらぬん 糸の清は

とひくかり 同上 後巻の清と付時

ハタ 同上 月影はとどろく船の岸

物支知書ハ 同上 月影は己入道ハ別筆

賦 同上 為事とひもそ雲花乃為云

清乃夢月を救まひく百八種惚力

清乃りの霧とる夕のよれまひとわ

つららや娘おれ清よ秋と入厚の

重勝てまの如の月のよと能め移り

てぬえん 同上 又未未れ清の夢は

花のゆよあぬ 同上 又新池の柳の

あら 同上 ぬれ中ふ深 同上 其あま

とめと世これ人親々林のう移えと

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

く 同上 若とさる紗乃尾上の清輪

おはてらむてりしとふらきほり

國の東にありてはとふらきほり

つぼくとしてあつらんとしてほり

とふるひのたのみひては

たりし子星をりてわらん

わくはちやとむらりて

つばくしてはくしては

あひてはくしては

あひてはくしては

あひてはくしては

あひてはくしては

あひてはくしては

あひてはくしては

あひてはくしては

あひてはくしては

あひてはくしては

あひてはくしては

あひてはくしては

あひてはくしては

あひてはくしては

何と申さるべきや 早 ありては

ちかきとめとていふもよ 三 一いふ浦に

ちかきとめとていふもよ 三 一いふ浦に

白鳥のふりて都をくわへては 早

あはれいふは海に 早 一いふ浦に

とていふて 早 一いふ浦に

の語と夕照のひ 早 一いふ浦に

ありて 早 一いふ浦に

かひ 早 一いふ浦に

いふ 早 一いふ浦に

いふ 早 一いふ浦に

いふ 早 一いふ浦に

いふ 早 一いふ浦に

いふ 早 一いふ浦に

いふ 早 一いふ浦に

いふ 早 一いふ浦に

いふ 早 一いふ浦に

いふ 早 一いふ浦に

いふ 早 一いふ浦に

いふ 早 一いふ浦に

いふ 早 一いふ浦に

いふ 早 一いふ浦に

いふ 早 一いふ浦に

いふ 早 一いふ浦に

いふ 早 一いふ浦に

いふ 早 一いふ浦に

小大念佛と申す。われ念佛ははれん
 長成物語の如く。母の白ひよつとせり
 乃ち経入せせし。相と去年三月
 十五日。度志と申す。此の都の
 去とて。二十三日。午時。此の念佛を
 と。人高人真つとて。下ゆ。けんかふ
 ぬ。縁のつと。ま。た。海。深。ら。る。る。と。れ。か
 は遠例。一。け。り。名。よ。ひ。き。や。し。ひ。ひ
 と。な。か。ん。ん。や。せ。お。や。と。く。ま。ん。成。老。の
 ぬ。ひ。け。り。と。と。か。さ。る。と。と。ん。な。ふ。ゆ。き
 お。だ。ん。と。の。控。を。高。人。の。真。へ。下。して。け。り
 と。と。と。と。と。ひ。の。ま。た。ば。ん。そ。も。よ。る。ふ
 よ。ら。流。ま。り。あ。よ。ひ。ひ。ね。は。痛
 ち。て。ひ。ん。だ。何。と。は。け。ひ。ひ。と。我。は
 教。の。白。川。老。田。の。か。ふ。し。と。申。す。の
 唯。子。よ。と。ゆ。う。ま。早。あ。て。文。ふ。い。と。れ
 ち。の。せ。母。人。よ。と。ひ。ま。の。ひ。ひ。と
 人。高。人。あ。と。い。ふ。あ。ひ。け。ま。と。と。作
 きて。吾。と。け。信。中。と。と。し。か。し。と
 来。て。ゆ。り。げ。後。次。の。去。中。よ。つ。と。あ。あ
 て。流。ひ。ん。と。と。い。ふ。か。く。や。に。疎。の。教。の
 人。も。是。よ。う。け。も。と。と。娘。の。ゆ。行。ふ
 う。極。ま。り。の。世。に。教。ま。う。と。と。母。は
 乃。事。と。と。何。ら。り。と。と。慈。愛。の。心。と。弱
 つ。い。ふ。い。と。と。あ。と。と。念。仏。の。遍。唱。入
 流。よ。か。つ。り。と。ひ。ま。と。と。か。れ。れ。ひ。と。と。た
 け。死。の。お。つ。ひ。び。か。し。と。と。か。く。か。き

是下ろは今の墓不あはれは

あひいへ 今とまをわうん

れふ今に世よりあはれ

とあはれいふてはむん死は

そてはあはれとあはれ

あはれりちとあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

いづれにたる者くは備し移るあてを
と六射くは強きこと種人乃ち中を
此初より後若と移若せとせしゆ大強
乃ち中をいふ事乃ち中付るや
とね作 科人せりところ
えと女まての正種ハ好し信
と正事申すい いふ女 内人
ぬまハ五箇一ありと小中
なより徳志の事りてゆねよま
乃ち中をわたりしものほひなる事
ぬまあをせとふ 実中中
は中中をわたりしものほひなる事

ひかちつものうらふ事なして
とわりおとせんと 上
とせしゆ大強
と正事申すい いふ女 内人
ぬまハ五箇一ありと小中
なより徳志の事りてゆねよま
乃ち中をわたりしものほひなる事
ぬまあをせとふ 実中中
は中中をわたりしものほひなる事

葉のうらぶしの園のせんかたきん
 物よねあひゆるり 定まのりとの別
 色落る乃その一方あつぬ身れねき
 ぬねれよあつぬありまねくうら
 くまのりとのあきちてせのるよ
 ひらく海と霧よあま出とくま
 西よあつぬくゆゆへ 一もはつね
 物やぬ物よあまひのりあつぬ
 少くはあつぬあつぬあつぬあつぬ
 甲よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 と 一やあつぬあつぬあつぬあつぬ
 甲よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 乙よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 丙よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 丁よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 戊よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 己よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 庚よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 辛よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 壬よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 癸よあつぬあつぬあつぬあつぬ

甲よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 乙よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 丙よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 丁よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 戊よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 己よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 庚よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 辛よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 壬よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 癸よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 甲よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 乙よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 丙よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 丁よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 戊よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 己よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 庚よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 辛よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 壬よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 癸よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 甲よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 乙よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 丙よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 丁よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 戊よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 己よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 庚よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 辛よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 壬よあつぬあつぬあつぬあつぬ
 癸よあつぬあつぬあつぬあつぬ

若き時とて海相名の被くくあつぬ

口よ 何討とま相あれ彼もや
申くの事 何のしとままよ

とまあしあつと彼とまあしあつ
とまあしあつと彼とまあしあつ

とまあしあつと彼とまあしあつ
とまあしあつと彼とまあしあつ

とまあしあつと彼とまあしあつ
とまあしあつと彼とまあしあつ

とまあしあつと彼とまあしあつ
とまあしあつと彼とまあしあつ

とまあしあつと彼とまあしあつ
とまあしあつと彼とまあしあつ

とまあしあつと彼とまあしあつ
とまあしあつと彼とまあしあつ

とまあしあつと彼とまあしあつ
とまあしあつと彼とまあしあつ

とまあしあつと彼とまあしあつ
とまあしあつと彼とまあしあつ

とまあしあつと彼とまあしあつ
とまあしあつと彼とまあしあつ

とまあしあつと彼とまあしあつ
とまあしあつと彼とまあしあつ

とまあしあつと彼とまあしあつ
とまあしあつと彼とまあしあつ

とまあしあつと彼とまあしあつ
とまあしあつと彼とまあしあつ

とまあしあつと彼とまあしあつ
とまあしあつと彼とまあしあつ

出上ハ内儀ツルもわく。殊ハ書あり
と示統おの宰府小志多人わさ
申上りてわゆえ 甲上
とヤキより志多今年ハ我親乃
十三年より申上りた上カ
とたなけぬ乃 松浦乃川原
付玉ありき 松浦此 孫後せい
かんれらひも神とたもふあ
色もれわくも能凡四意思サ
何と申上りていづくかき
つて申上りていづくかき
乃と志多いふ松浦乃川原二世れ
実と能ふんま

兼 舟并考

早身 舟并考
まの志の立務衣がふまの立務衣海
落とい川とさかき 毛ハ松浦
乃儀小位番とゆ武義防弁慶に
ていふとを我義判友友ハ新約れ
代官とて鬼かきらまかそり
平家流わらかり松ハ今ハ先才
の甲申日月乃志多く西産五へ
女も松のひをさ志の流ま
甲申申上りて世終小申 延く日
と志多うそい松志多我義判友
乃礼と志多い松の志多部と
ひと志多い申上りて志多い
作申上りて志多い今日教と

けふ尼勝大物の浦へと急ゆ立元此

文治乃初つて杉胡義隆不世に世

既為指し力なく判友勅とを

近乃道様くかぬ立元物必の

方へと急ゆ立元内と相極くとを

井乃凡おももつて文治の名所一

年平家追討を勅書より引替く

唯指余人とせくとはとてかぬ

そと母乃よりつる智をあらはす

をさおひひ事世中乃今事何とを

清みかくも足備ゆと六非を知らん

とるるに彰成ゆ立元おも修る事

く藤公立元くも浪をなよ引大物

阿志乃津西尼勝大物のうら

是めてゆけ亦よ来ぬ此者のゆけ

常と申付たうとゆてゆて先か

産へ西家移るゆけと及くを絶

ひてゆ今乃相言似合ぬあうゆ未

中上とめうとゆてゆてゆてゆ

ゆゆと及くを絶ひてゆ何と断ん

似ぬ中うゆゆとゆゆと断んゆ

わさうとゆゆ判友そとかくも并廢

とるゆゆへ判友思てゆ目今一乃ゆ

媛よりよてゆゆ何とてゆゆゆ

ま我やうとゆゆとゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

後とて何の為なるに便めてゆて

早 人の世と素常の縁の縁はあつて

秋を乃の定よはとこれに素殊非

妙は念食も作らるるらうらうらう

とらうらうのさけはふらふら人

ははうらうらとゆらもは人いぬわ

まとの中事とゆ レテ ちち思ひ来

和女作らる何かともゆはてくも

ぢひりよ粧もて色染もくをたは

ひとのあわら色もあわ 早 信の

尤も人のぬはさ事と何とて 早 止

成ら 早 事 早 止 早 止

早 止 早 止 早 止

あつた 早 止 早 止 早 止

とゆよ 早 止 早 止 早 止

はひ 早 止 早 止 早 止

中 早 止 早 止 早 止

さ 早 止 早 止 早 止

閑 早 止 早 止 早 止

と 早 止 早 止 早 止

来 早 止 早 止 早 止

この 早 止 早 止 早 止

上の 早 止 早 止 早 止

よ 早 止 早 止 早 止

若 早 止 早 止 早 止

是 早 止 早 止 早 止

は 早 止 早 止 早 止

是ハ昔一^三朝ハ唯人^上口^上と^上言^上あり
由^上ん^上ら^上ん^上と^上か^上は^上言^上と^上候^上と^上流^上
ク^上ル^上一^三つ^上や^上也^上又^上爾^上又^上難^上か^上ら^上ぬ^上身
ま^上ら^上恨^上た^上か^上ら^上し^上道^上と^上も^上是^上ハ^上身^上給^上力
ク^上と^上そ^上て^上な^上る^上ふ^上 彼^上風^上も^上給^上と^上る^上光
強^上ふ^上と^上つ^上洞^上と^上か^上し^上核^上と^上す^上て^上の^上
新^上く^上穿^上て^上来^上り^上一^三と^上候^上つ^上し^上申^上
と^上言^上な^上ら^上や^上後^上や^上別^上ら^上し^上ゆ^上さ^上り^上と^上
一^三と^上命^上た^上ら^上し^上お^上も^上た^上ひ^上と^上ん^上と^上た^上
一^三お^上の^上末^上 一^三お^上の^上末^上 一^三お^上の^上末^上
お^上の^上末^上と^上い^上へ 畏^上て^上候^上言^上と^上
是^上ハ^上門^上出^上乃^上び^上末^上と^上代^上と^上く^上菊^上の^上盆
お^上の^上末^上と^上い^上は^上ぬ^上を^上れ 一^三と^上命^上た^上ら^上し^上
ひ^上や^上ぬ^上か^上り^上た^上ら^上し 一^三と^上命^上た^上ら^上し^上若
一^三お^上の^上末^上乃^上び^上末^上と^上代^上と^上く^上菊^上の^上盆
お^上の^上末^上と^上い^上は^上ぬ^上を^上れ 一^三と^上命^上た^上ら^上し^上
ひ^上や^上ぬ^上か^上り^上た^上ら^上し 一^三と^上命^上た^上ら^上し^上若

一^三お^上の^上末^上乃^上び^上末^上と^上代^上と^上く^上菊^上の^上盆
お^上の^上末^上と^上い^上は^上ぬ^上を^上れ 一^三と^上命^上た^上ら^上し^上
ひ^上や^上ぬ^上か^上り^上た^上ら^上し 一^三と^上命^上た^上ら^上し^上若
一^三お^上の^上末^上乃^上び^上末^上と^上代^上と^上く^上菊^上の^上盆
お^上の^上末^上と^上い^上は^上ぬ^上を^上れ 一^三と^上命^上た^上ら^上し^上
ひ^上や^上ぬ^上か^上り^上た^上ら^上し 一^三と^上命^上た^上ら^上し^上若
一^三お^上の^上末^上乃^上び^上末^上と^上代^上と^上く^上菊^上の^上盆
お^上の^上末^上と^上い^上は^上ぬ^上を^上れ 一^三と^上命^上た^上ら^上し^上
ひ^上や^上ぬ^上か^上り^上た^上ら^上し 一^三と^上命^上た^上ら^上し^上若

けしきつゝのきんりあて政事お任せ
 あつめりたるらん心あつく成念
 とぞうぬる名をみみしるもく天
 乃とらんゆへお尋ふ筆さして入明
 此を待とれしむき系例一毛
 月の若敷さつりもあつる海乃
 信務の部を身れ替のたすさうと
 物結り彩物も後よおもむ柳此
 校とほのりゆ移りたすくふりた
 つたさ 唯れあ舞 只れあ志めり
 系れさうとら秋世中よあむ恨久
 ありんる念のゆりあくはくまむお
 いれゆりなをい念をもは代よああ乃
 けしきつゝのきんりあて政事お任せ

くささめりせを判なを議れやら
 とかたすハ身れ移りたすく 烏帽手車
 案のさ控て後よむは別だるめを
 衣なりりるく あり痛くわい
 の山の中あさり 我あと落後仕てい
 兼所よとあさうとああてい いふ
 武蔵あさう山 何事して作と
 けしきつゝのきんりあて政事お任せ
 くは箱おゆ違ふや作たまはてい
 何とゆ違ふよや 中この事 果
 意度指さしていおふ若所と御
 情もあてあうよ作あさうとらな
 けしきつゝのきんりあて政事お任せ
 へ今はゆあてあうのゆ事ハは匡

と東よぬらうと好む其止一年後迎

船傳と申す立一時は乃卯れ大風也

一お君は舟とが一語の半程と七

一語ひ一幸今心く同一年事と上

意交し舟出む一上上実心は

一也いづこ一はたしあまの早

一はつちまも一早多のくひり

一ふもて船とを一まが一甚不

一怒風うあつらひおのむこ山嵐格つ

らうお嶽らう吹おらうと山風よびは舟の

一陸地よ分へきかうとを記さるる年

一は沙形念へ一いふ武蔵多り

一へと申のゆ一何事うとゆそ

一舟中よてはた極の事とがやとぬ

一事一そゆ何事と武蔵と申す

一お山行をゆ一荒婦一を海よと

一れもぬあうと亡ひ一平あは公

一とのくうらみおまふそやが家時

一ささうらひて恨とあさもておが

一り一いふ弁慶一何事ゆ一と文

一警るがうと惟思其恨とあさうら

一何箱れ事ゆのふとそ無運とるの

一を獲つと非的は路力真感とる

一天者よ流り一平あはつゆ一外

一と初よりと一門力月ゆとあは

一正一はらうらうと見とあはれ一柳是ハ

一桓武天皇九代の後胤平とあは

一三十五

三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

自然居士

早
是と東方の人商人也其の材は
程と教ふは有り雅者と云人其れ
一いつし時乃晒と一其れと云は

寺僧人をも山麓しあうらひをわす

をすまひ男の人商人うそをわす

ねえのいけがふゆふをわす

りやくらんらうゆをわす

ふふ及へーが指士大付松本と座ん

の格さげわ袖と座ー今のれま

ふふ人さうあうんうと座ん

実く説法うそーからふをわす

かうー説法ふふをわす

あ也その地さなう人ふ言人あまふ

悪人ふふ善悪の二乃ふふ

まふ説法はさふあり

徳善及於一切我等与衆生皆共

いふふふふふふふふふふ

船とえたりとて法を

いふふふふふふふふふ

いふふふふふふふふふ

いふふふふふふふふふ

我を縁人ふふふふふ

いふふふふふふふふふ

いふふふふふふふふふ

いふふふふふふふふふ

いふふふふふふふふふ

いふふふふふふふふふ

いふふふふふふふふふ

いふふふふふふふふふ

いふふふふふふふふふ

二條二條二条不めんをくハ今備
びる歌のまじりかよ六碑事

早
実面ゆくもかへらまらりはとく何

のし月屋ん 七 是を自然指す

史の統御なきなりう統法乃場と

はるまはける恨やよまりり 七
統

法は通理との色終ふ我未は解

あふりのと 八 能事やとやと

して善し南よどこの中袖を

よはあしとふまてかやうとど

とそよはよひのの船と

なつと引とじり 九 阿ら勝るま

かろが家よまされてえとて

色をく威ふかろ 一〇 何と

く威ふま 一〇 引まを

八 龍 家ハまは樂成を

九 考の出い 一〇 わい

つとてゆいそんあくさひい 一〇

ハ条海の首を建めていり何と

事めていり 一〇 是は

居るとして統御者ありとて

日乃統法と破るてそまて

あふ人と居るは終りいハ

へましたるい 一〇 居て

しては終り事とせなは

中よわとて大法のい 一〇

乃由山舞とまゝて出見をいへ

船士のころとく脱離とくこととて

舟まきする事いなくい 阿ふ実

うとふの脱離をいおそはるは田舎

や糸乃糸かーのいもとめてはあ

いへ けいこをいおとをやとて

いん 船士の舟まきあめり半八は

まよとけいこ脱と糸かーのふりあふ

面とちなりおつ道なを脱りい何

のつまかふかき 志安幸徳をい

松 船をい入るんう船 舟まきあめり

ま葉のいみーふて見たこといひり

ま ころハけいこお取の目かをい

迷はあつ 加道とてやさんく志

あま鳥にとい海と高て貴い言やう

とからりーの 美帯れは下りい貴

秋とて舟と年わりあ耐代目杖を

上の池を面くと入るてせおお

秋の葉なりお空を脱離をいお柳乃

一葉水よりうみーい又味とてい

是も慮をいお高きつるう其い葉の

よよ葉のい空くは藤解をい

たりたりも柳をいおあつあつ

よはそをいけいよあやー秋音乃

まは舟跡のゆりもい実りくおひ

初ーうらうらとて船とけいあ

美帯をいよめれで馬にと漕渡

オウコト平内くみ 内腹をむす
てい來を國乃名申てい分田舎土着
乃と名よ而申と申てい分六行矣八極七
せうらふふ(妻)田かーより申てい分
な 早より船を渡り着る 舟上 舟上
被らば乃とてい分せそを名とてい分
うり天雲海より舟神れぞろくと
を海時を渡りるなるくもろくと小
篠乃竹の編木とてい分程云かろ七
法乃及今ハ言程の程より也高航
乃ららてい分うとらば進てとて
は程のちりきりとてい分は進てとて
乃

早河 東海船士

早河 是ハ東國より名とてい分は程は乃ハ
船より海陽乃名申田名一見は
笑とてい分清水寺ハ名とてい分は
松とてい分名申木よ候かてい分
舟をわくてい分 夫らとてい分世に
舟は申電光舟名とてい分は
く人分れおとてい分舟は洩沫又はか
とらりてとてい分世申れ上 血分目
色小車ありてい分は洩沫とてい分白川の
ふよふとてい分橋板を舟ひかきん
うかく 舟上 舟上 舟上
ハ承及より東名船士申てい分は
三 ぶんハ東名船士申てい分 舟上 今日ハ

いさうあり種々の入るて 業め

三

四十三

一と同一く其種々のいひを

半の皆目ある境果ある柳を

ころの花はさきお并ぶあむのま

なりきやあ 室向むらひをふ

さして橋は川乃伏ら後なれり橋

うて作き 乞ひ先師自給は吉

法界を縁乃うりさとらと後した

まふ橋あまはと又ふふとせむ

あり 口上 是くも家ある指きのさ里

はらう 口上 あり父母ととて

いふ家とや じつと一の事とて

ふやふらとてふとあまは

縁の變りては

あせしたくとのつらなうか

早 口上 ありて

控てと 口上 ありて

とふ後しては川よ 口上 ありて

外 口上 ありて

そのこゝにあくもゆきと南枝水

枝の梅のむきとる法を二ある後

じための橋あまはとてあまは

し 口上 ありて

ひと 口上 ありて

れ 口上 ありて

縁とふあまは人あまのむら曲

え 口上 ありて

い 口上 ありて

乃重海の下ふかことば無慈悲
 かきよふらやとせう移つたさう
 移つたのやとば後よめと申か
 しがはつてか死身とわくや教
 かうたう邪婦ハ 身よとてはく
 けつりありあはれまこと無慈悲ハ
 てはくけつりありとんくちんくらハ
 又よとては後よめと申か
 まさかみまかの身よとてん 申
 申よ八様とて申を以 面白
 や松吹風さうくさうして彼のしん
 らくきさう 石は名よたあ海湯の
 かめとまき白河乃 彼のつとや
 男女乃往來 其後よ下のしん
 つと孫したまはれさうとてん
 かさうら八様うらるて 百千香
 下 百千香はけつりまハ相とよ
 わつたまきととあそあり 八
 白河く乃橋とてんてんひか
 東倉 ちかハ 東倉 け岐ハ
 ちから ちかハ け岐ハ ちかハ
 く橋木のあはれれや川の由法と
 ちかハちかハとてんてんてんてん
 ちかハ南無三尊 実ち相とてんてん
 ちかハちかハちかハちかハちかハ
 川のあそひとてんてんてんてん
 ちかハちかハちかハちかハちかハ

おのゝ実相のいづらやう

三十一

星夜 花月

風は海より海雲にけくやゆら
くたるとむ 日 乞ふ能葉はくせん
葉は任指し何傍中は我信也の
ゆ時子然も人おとけしと七果と
中一ま乃法仍事とあくとう一
ておそれちる世わらまあくはる
此波りとあ来ては初と人あわら
あての難よ公春さひま文たよはり
仍葉と花のよとと世ひか 中
親もかゝ親乃か多とを我あふ
ととひるあもかゝし子星とけも
かゝとけあゆ一ゆまゆらあては
あもひもつさふらつく 意ひ程

小於信あもふとては公路小仍葉と
為たやととひか 一 押乞と花月
とり者也あ何人我若とハ何とて
心月とつとそととををわ世あふ
月ら考信ふしとたか尸おとと
次おとれややととととととと
ハ尻松とこのととととととと
ととととととととととととと
いんも 上人ととととと 相ふ事世の
ととととととととととととと

花月と我と一歩ありて
 今の世もくは終せぬ袖はさく
 けくせ袖もさくはくせのくせとの
 くれ身はうしくはくさうはくさうさ
 らふ恋とてはくはくはくはくはく
 袖と袖とわくはくはくはくはくはく
 をくはくはくはくはくはくはくはく
 ちかちかちかちかちかちかちかちか
 又あくはくはくはくはくはくはく
 をくはくはくはくはくはくはくはく
 けくはくはくはくはくはくはくはく
 くに百矢といふはくはくはくはく
 むの未末はくはくはくはくはくはく
 一あはくはくはくはくはくはくはく
 はくはくはくはくはくはくはくはく
 ちかちかちかちかちかちかちかちか
 てはくはくはくはくはくはくはくはく
 ともあはくはくはくはくはくはくはく
 一はくはくはくはくはくはくはくはく
 ちかちかちかちかちかちかちかちか
 へはくはくはくはくはくはくはくはく
 ともあはくはくはくはくはくはくはく
 一はくはくはくはくはくはくはくはく
 ちかちかちかちかちかちかちかちか
 へはくはくはくはくはくはくはくはく
 ともあはくはくはくはくはくはくはく

花月と我と一歩ありて
 今の世もくは終せぬ袖はさく
 けくせ袖もさくはくせのくせとの
 くれ身はうしくはくさうはくさうさ
 らふ恋とてはくはくはくはくはく
 袖と袖とわくはくはくはくはくはく
 をくはくはくはくはくはくはくはく
 ちかちかちかちかちかちかちかちか
 又あくはくはくはくはくはくはく
 をくはくはくはくはくはくはくはく
 けくはくはくはくはくはくはくはく
 くに百矢といふはくはくはくはく
 むの未末はくはくはくはくはくはく
 一あはくはくはくはくはくはくはく
 はくはくはくはくはくはくはくはく
 ちかちかちかちかちかちかちかちか
 へはくはくはくはくはくはくはくはく
 ともあはくはくはくはくはくはくはく
 一はくはくはくはくはくはくはくはく
 ちかちかちかちかちかちかちかちか
 へはくはくはくはくはくはくはくはく
 ともあはくはくはくはくはくはくはく
 一はくはくはくはくはくはくはくはく
 ちかちかちかちかちかちかちかちか
 へはくはくはくはくはくはくはくはく
 ともあはくはくはくはくはくはくはく

無分あそび解しきき先魂は家お六
老の心よりまよひとまわし一僕彼
中を松山ゆりつじま氏よりと孫板作
者中ら大せんく丹後丹波北さひ
勿り冠う膝くまひの天物らり晩た
をふしや板系らり死ゆさそまらり
さゆくあさのあふる糸防比良
の峯志波節防者さまひえ
の大鞍よどしりしんまをさうそ
月乃後河乃かろ道すれ日比谷金すよ
ゆこんく金やまんとなめしよ
博やさるちんふんきううた家きき
ふしきまあまのさる根よあつりは
なすかたむたありありあひは
くくあぬらふのさるはらり
くそとゆめての帆ひの舞しはうそ人
ゆきまのまいととあつはりまの
傍よあひまゆさるしはま今よ
くまきららるく控くさそあま
四傍よつ道ききせそはらつ道き
らそそはら乃はりよゆらそら
きりききききき

音の

羊角
そく教の慈母ふ何病と何を傳きて
ゆきけな及果入とはは又幼きをさ
一人あそびか父おられたる母一人よまひ

何とて山色そりゆそ 17年 松あり夕暮

入るに侍せうと侍由作の只今も中

とくたさむさ若の侍せうと侍を

てなすし其と風をら地よりしん

へを袖もて山形のためと作の板

何とて中へさせんは夜も山をひへうと

海 17年 光の松ありとく侍道乃

山侍中孝入せむとこそむら茶を

也とて山形之父よとて一山あり

とく種りよのむとて又杖植も

れむむを乃身よとてふ時ふみぬを

心落かくとまもとてさしむらてを

さくし山へさくさ内りひへ 17年 侍を

侍入の山形り乃侍はせし母乃侍を

彩らんとさひまふ侍を乃侍を 17年 侍を

今と侍侍其氣を侍道と母もあ

そとあ侍孝り乃ぬを侍侍侍を

侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍

侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍

侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍

侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍

侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍

侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍

侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍

侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍

侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍

侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

廿八日命ふ定めたることせ給ひぬ御何
とていふは 由は信らうとてきりり

かきあひのわきとてえとていりり人

文は書あそもえとていりり人

いふふふ 何事やとていりり人

あはれのまらとていりり人

そとていりり人

あひていりり人

いりり人

いりり人

いりり人

いりり人

いりり人

いりり人

いりり人

いりり人

いりり人

いりり人

いりり人

いりり人

いりり人

いりり人

いりり人

いりり人

いりり人

いりり人

むすびのふ後^りのう 何事^もあは

そ^り先^きき入^りのむわ^らと^りのふ^らは^らか

の口^は歌^うと^りて^り病^の氣^を歌^うと^りた^りか^り

あ^らい^とえ^きを^りて^りの^りな^らむ^らか^りあ^らひ^りせ

との^り何^事も^もあ^らむ^ら何^れと^りは^らい^とい

先^きき^りの^り山^の歌^うと^りむ^らあ^らひ^り歌^うと^りな^らい

は^ら月^はた^らけ^りと^りと^りあ^らむ^らの^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りの^りた^らけ^りの^りた^らけ^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

ゆ^りげ^りゆ^りき^りを^りよ^りと^りと^りあ^らむ^らと^りあ^らむ^らと^り

南方軍臨利夜^{四上} 西方大威徳的^三
五^二 北方合到^{四上} 夜^一 夜^二 中央^三
大^{四上} 不動^一 不動^二 不動^三 不動^四
不動^五 不動^六 不動^七 不動^八
不動^九 不動^十 不動^{十一} 不動^{十二}
不動^{十三} 不動^{十四} 不動^{十五} 不動^{十六}
不動^{十七} 不動^{十八} 不動^{十九} 不動^{二十}
不動^{二十一} 不動^{二十二} 不動^{二十三} 不動^{二十四}
不動^{二十五} 不動^{二十六} 不動^{二十七} 不動^{二十八}
不動^{二十九} 不動^{三十} 不動^{三十一} 不動^{三十二}
不動^{三十三} 不動^{三十四} 不動^{三十五} 不動^{三十六}
不動^{三十七} 不動^{三十八} 不動^{三十九} 不動^{四十}
不動^{四十一} 不動^{四十二} 不動^{四十三} 不動^{四十四}
不動^{四十五} 不動^{四十六} 不動^{四十七} 不動^{四十八}
不動^{四十九} 不動^{五十} 不動^{五十一} 不動^{五十二}
不動^{五十三} 不動^{五十四} 不動^{五十五} 不動^{五十六}
不動^{五十七} 不動^{五十八} 不動^{五十九} 不動^{六十}
不動^{六十一} 不動^{六十二} 不動^{六十三} 不動^{六十四}
不動^{六十五} 不動^{六十六} 不動^{六十七} 不動^{六十八}
不動^{六十九} 不動^{七十} 不動^{七十一} 不動^{七十二}
不動^{七十三} 不動^{七十四} 不動^{七十五} 不動^{七十六}
不動^{七十七} 不動^{七十八} 不動^{七十九} 不動^{八十}
不動^{八十一} 不動^{八十二} 不動^{八十三} 不動^{八十四}
不動^{八十五} 不動^{八十六} 不動^{八十七} 不動^{八十八}
不動^{八十九} 不動^{九十} 不動^{九十一} 不動^{九十二}
不動^{九十三} 不動^{九十四} 不動^{九十五} 不動^{九十六}
不動^{九十七} 不動^{九十八} 不動^{九十九} 不動^百

道成寺

早^四 紀列^一 成寺^二 此^三 住^四 住^五 住^六 住^七 住^八 住^九 住^十 住^{十一} 住^{十二} 住^{十三} 住^{十四} 住^{十五} 住^{十六} 住^{十七} 住^{十八} 住^{十九} 住^{二十} 住^{二十一} 住^{二十二} 住^{二十三} 住^{二十四} 住^{二十五} 住^{二十六} 住^{二十七} 住^{二十八} 住^{二十九} 住^{三十} 住^{三十一} 住^{三十二} 住^{三十三} 住^{三十四} 住^{三十五} 住^{三十六} 住^{三十七} 住^{三十八} 住^{三十九} 住^{四十} 住^{四十一} 住^{四十二} 住^{四十三} 住^{四十四} 住^{四十五} 住^{四十六} 住^{四十七} 住^{四十八} 住^{四十九} 住^{五十} 住^{五十一} 住^{五十二} 住^{五十三} 住^{五十四} 住^{五十五} 住^{五十六} 住^{五十七} 住^{五十八} 住^{五十九} 住^{六十} 住^{六十一} 住^{六十二} 住^{六十三} 住^{六十四} 住^{六十五} 住^{六十六} 住^{六十七} 住^{六十八} 住^{六十九} 住^{七十} 住^{七十一} 住^{七十二} 住^{七十三} 住^{七十四} 住^{七十五} 住^{七十六} 住^{七十七} 住^{七十八} 住^{七十九} 住^{八十} 住^{八十一} 住^{八十二} 住^{八十三} 住^{八十四} 住^{八十五} 住^{八十六} 住^{八十七} 住^{八十八} 住^{八十九} 住^{九十} 住^{九十一} 住^{九十二} 住^{九十三} 住^{九十四} 住^{九十五} 住^{九十六} 住^{九十七} 住^{九十八} 住^{九十九} 住^百

一、^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十} ^{二十一} ^{二十二} ^{二十三} ^{二十四} ^{二十五} ^{二十六} ^{二十七} ^{二十八} ^{二十九} ^{三十} ^{三十一} ^{三十二} ^{三十三} ^{三十四} ^{三十五} ^{三十六} ^{三十七} ^{三十八} ^{三十九} ^{四十} ^{四十一} ^{四十二} ^{四十三} ^{四十四} ^{四十五} ^{四十六} ^{四十七} ^{四十八} ^{四十九} ^{五十}

一、^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十} ^{二十一} ^{二十二} ^{二十三} ^{二十四} ^{二十五} ^{二十六} ^{二十七} ^{二十八} ^{二十九} ^{三十} ^{三十一} ^{三十二} ^{三十三} ^{三十四} ^{三十五} ^{三十六} ^{三十七} ^{三十八} ^{三十九} ^{四十} ^{四十一} ^{四十二} ^{四十三} ^{四十四} ^{四十五} ^{四十六} ^{四十七} ^{四十八} ^{四十九} ^{五十}

一、^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十} ^{二十一} ^{二十二} ^{二十三} ^{二十四} ^{二十五} ^{二十六} ^{二十七} ^{二十八} ^{二十九} ^{三十} ^{三十一} ^{三十二} ^{三十三} ^{三十四} ^{三十五} ^{三十六} ^{三十七} ^{三十八} ^{三十九} ^{四十} ^{四十一} ^{四十二} ^{四十三} ^{四十四} ^{四十五} ^{四十六} ^{四十七} ^{四十八} ^{四十九} ^{五十}

一、^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十} ^{二十一} ^{二十二} ^{二十三} ^{二十四} ^{二十五} ^{二十六} ^{二十七} ^{二十八} ^{二十九} ^{三十} ^{三十一} ^{三十二} ^{三十三} ^{三十四} ^{三十五} ^{三十六} ^{三十七} ^{三十八} ^{三十九} ^{四十} ^{四十一} ^{四十二} ^{四十三} ^{四十四} ^{四十五} ^{四十六} ^{四十七} ^{四十八} ^{四十九} ^{五十}

一、^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十} ^{二十一} ^{二十二} ^{二十三} ^{二十四} ^{二十五} ^{二十六} ^{二十七} ^{二十八} ^{二十九} ^{三十} ^{三十一} ^{三十二} ^{三十三} ^{三十四} ^{三十五} ^{三十六} ^{三十七} ^{三十八} ^{三十九} ^{四十} ^{四十一} ^{四十二} ^{四十三} ^{四十四} ^{四十五} ^{四十六} ^{四十七} ^{四十八} ^{四十九} ^{五十}

去るる足あきかきと物づくありかの
 去るる一は是女よあへ入一うと
 去る一娘とてうあひのあもり一
 あれあ傍ハ女うまあよあれよよと
 去るよとせられたるかんよは残と云
 一年月と送後去程よはあ傍又
 去時去る一う許よとありのもはば
 女中屋う我よあはれと云うは控重
 給よとげなつてとて奥へおちりあ
 是と中とてと耐あ傍たあよはそ
 だ夜よゆとてとてと一う許と
 あきよあ女うはと一やそかひ
 来一よよあ伏け寺一よ来つるか
 けりよあはれとてとてとてとて
 まねらげとる老あうり合後合一
 かのそおと一してあ一かりとあ
 去ひと耐りはと端とあ一と岸
 お思とてと行よは女とひとと河の
 去りよあまもとあありと一と
 去目よ河のあゆとてとととと
 去とあわ一と一急の毒地とて
 ひとあよととととととととと
 去よ来つるあわ一ととととと
 一とととととととととととと
 去ひと頭ととととととととと
 去とととととととととととと
 即産あうせぬあわととととと

後少くも 近江師一と相傳ふ

てしうは南河といふ 甲 東条好

の其尉の大蛇巻とてかゝり今と此種

の海身致すまゝとて此の年月に於て

とてあるありしうは此種とて

いのり二たひ種播へる案をて

てん 乙種といふ 甲 大蛇といふ

乙種ありてはあふけり日言は

まゝこの教の趣はさるる表の傳り

行くなきわち 丙 同一とてあ

け 甲 東方は海とて明王 南方

は軍荼利夜叉明王 西方は

法明王 乙 西方は金剛夜叉明王

のなりしうは南河といふ

うぬらふといふ名なりしうは

傳ふといふせんたぬうらま

やうんといふ他漢滿ちる

大智恵多我身者即身成仏と今

地身と行傳ふる何の根う

傳ふといふ地身といふ

初とてまゝといふ名も

乃施羅尼不初力といふ

大端の黒煙頭ありて

甲のいふては種といふ

おといふては種といふ

一種といふ種は

是れは地神ハ

東方は

へは為神ゆきを宿とわしりてまのひ

実徳人の好ひ物かかきわらふも

あし。あし存世ふ秋のまき物家の

風を身かしめを胸と体じむ事も

なく。あしをきくきくきくきくきく

よ中を後あしあし定めおれし生海を

あしあしあしあしあしあしあしあし

そ 是の回あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあし

ハ秋ニシキのきり受むわく世

リニヤ物申シハ ^{コキ} 一ハ七音の

おそておしふいふくは見えぬハ

想^キハ縁人ナクもめもさあどり

とあく後^上ニ業^{コキ}了^{コキ}そ物^{コキ}を^{コキ}終^{コキ}

ニヤ^{コキ}も^{コキ}あ^{コキ}は^{コキ}の^{コキ}あ^{コキ}く^{コキ}は^{コキ}佛^{コキ}の^{コキ}世^{コキ}

月^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}早^{コキ}乃^{コキ}中^{コキ}の^{コキ}麻^{コキ}

の^{コキ}系^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}麻^{コキ}業^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

一^{コキ}若^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}後^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

世^{コキ}の^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}世^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

物^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}世^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}世^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

く^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}世^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

佛^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}世^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}世^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}世^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

ら^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}世^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}世^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}世^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

ひ^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}世^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}世^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}世^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}世^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}世^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}世^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}世^{コキ}と^{コキ}一^{コキ}の^{コキ}

そよひなきる人わらひ 日 如後の

あまのうら シテ 練光丸車

そよひ 日 系梯 シテ 威 シテ 嘆

いそ 日 人 シテ ぬ シテ 乃 シテ 常 シテ 結 シテ 命

秋乃 シテ 糸 シテ 薄 シテ 月 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

今 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

難 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

あ シテ の シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

あ シテ の シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

と シテ の シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

女 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

て シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃 シテ 乃

中 元上三 心也其人所とを 一 歩 二 沙 三 塵 四

き方 一 なる 二 縁 三 とも 四 是 五 一 六 海 七 有 八 小 九 十

け 一 妙 二 く 三 四 五 六 七 八 九 十

了 一 我 二 去 三 中 四 也 五 亦 六 有 七 一 八 國 九 其 十

と 一 わ 二 海 三 よ 四 か 五 さ 六 中 七 中 八 海 九 中 十

り 一 たり 二 ひ 三 縁 四 と 五 あ 六 ゝ 七 と 八 や 九 ね 十

力 一 あり 二 身 三 なく 四 たり 五 且 六 井 七 凡 八 山 九 を 十

た 一 ち 二 三 四 五 六 七 八 九 十

わ 一 く 二 鉄 三 杖 四 の 五 い 六 き 七 の 八 わ 九 り 十

の 一 ゝ 二 の 三 海 四 東 五 方 六 小 七 深 八 三 九 世 十

西 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

俺 一 阿 二 毘 三 羅 四 う 五 ん 六 ひ 七 そ 八 ゝ 九 う 十

他 一 漢 二 漢 三 見 四 我 五 身 六 者 七 終 八 至 九 抱 十

聞 一 亦 二 存 三 者 四 愚 五 候 六 若 七 聽 八 我 九 說 十

大 一 智 二 慧 三 智 四 我 五 身 六 者 七 即 八 身 九 成 十

成 一 仏 二 の 三 心 四 を 五 乃 六 を 七 生 八 じ 九 世 十

せ 一 ゝ 二 我 三 身 四 中 五 者 六 有 七 相 八 中 九 者 十

鬼 一 女 二 有 三 ゝ 四 中 五 者 六 有 七 小 八 の 九 界 十

よ 一 身 二 と 三 生 四 ゝ 五 中 六 者 七 有 八 小 九 の 十

あ 一 ゝ 二 中 三 者 四 有 五 小 六 の 七 界 八 中 九 者 十

ま 一 わ 二 知 三 ゝ 四 我 五 身 六 中 七 者 八 有 九 小 十

上
ゆゑにわたりて、
力なきは、
のきき、
「あゝ、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、
いふに、

いふに、
いふに、
いふに、
いふに、

一樹の陰に 一河の勢

くまの酒をいそぐに 控はるるをたて

知くかろくを移すはらうそじきん

争うる事本はらうとさるんよりと

海を流るる魚の美し酒の味を

かゝる事 案をわらひをせしふ

しるるを所しは控はるる人なれば

さうらとれあうさ整ふためとらや

らんくは酒とあてめて紅雲とすく

さや 案わらひをせしふいそがの

より著ししうがしく 神色紅雲家

志を重なり相おさるるをせし 甲

らんくは酒とあてめて紅雲とすく

さや 案わらひをせしふいそがの

あつたてのうらみはなつたふゆ
まはふりあつたてのうらみはなつたふゆ
まはふりあつたてのうらみはなつたふゆ
まはふりあつたてのうらみはなつたふゆ
まはふりあつたてのうらみはなつたふゆ

上珠

あつたてのうらみはなつたふゆ
まはふりあつたてのうらみはなつたふゆ
まはふりあつたてのうらみはなつたふゆ
まはふりあつたてのうらみはなつたふゆ
まはふりあつたてのうらみはなつたふゆ

あつたてのうらみはなつたふゆ
まはふりあつたてのうらみはなつたふゆ
まはふりあつたてのうらみはなつたふゆ
まはふりあつたてのうらみはなつたふゆ
まはふりあつたてのうらみはなつたふゆ

くらまのひありさうあがとりのゆらまひ
 うゆらまひさうさうさうさうさうさうさう
 其間七尺のうらみとりの雲をたてて
 まへに裁かす雲の糸をさうさうさうさう
 とゆらまひさうさうさうさうさうさう
 らひさうさうさうさうさうさうさう
 先きゆきと中お知りあつたさうさう
 くらまのひありさうあがとりのゆらまひ
 一さうさうさうさうさうさうさう
 けり 早 言はれぬさうさうさうさう
 海蔵光知りあつたさうさうさうさう
 半さうさうさうさうさうさうさう
 せらまひさうさうさうさうさうさう
 くらまのひありさうあがとりのゆらまひ

くらまのひありさうあがとりのゆらまひ
 急退治仕入 早

作 早 荒山風が吹きたての通りさう
 ハ風をたてさう 早 けり 早

くらまのひありさうあがとりのゆらまひ
 けり 早 言はれぬさうさうさうさう
 海蔵光知りあつたさうさうさうさう
 半さうさうさうさうさうさうさう
 せらまひさうさうさうさうさうさう
 くらまのひありさうあがとりのゆらまひ
 急退治仕入 早
 作 早 荒山風が吹きたての通りさう
 ハ風をたてさう 早 けり 早
 くらまのひありさうあがとりのゆらまひ
 けり 早 言はれぬさうさうさうさう
 海蔵光知りあつたさうさうさうさう
 半さうさうさうさうさうさうさう
 せらまひさうさうさうさうさうさう
 くらまのひありさうあがとりのゆらまひ
 急退治仕入 早
 作 早 荒山風が吹きたての通りさう
 ハ風をたてさう 早 けり 早

出来たる里屋の一作劣る紙本に付り。

唯々信濃國を先と云ふは上巻

如くは渡や志智の浦亦これ其の

荒乳の山歎て袖小露あつる如く橋

りもくともあつる銀海乃旅れりし

了も違ふまじ上 指波川邊ありのく

安野の松乃夕燈をしねほりて花と

き清涼は乃銀の明波山雲流うか

よと銀海乃玉の素あつる里と云ふ

中巻公を先傳さる何れも云ふなり

く 中巻は程よそへも也銀後と

銀中の境川よ中と云ふは是より乃

二のち中川程おを原の者おはる

昔老より乃銀後の極神よりなりて

久は是より乃二のち中川中あをわ

采あえとり乃乃の是は云は乃海邊

唯心を淨くおすと云ふは乃乃

此より乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

実や昔より乃乃乃乃乃乃乃乃乃

去る乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

道は乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

是を乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

か宿まきせん ^早 色ハ秋の夕ぐれ

老をよき侍若ふてゆく俄より若く

若くも亡しとてゆきゆくも一くも取

ゆきゆくもゆくも ^{ヒテ} 一くも取

地宿まきと侍申。おかし子細也。

取及る山と名の所れ一帯くひて

まらふ所流るひかりあひくくとふ

へーどまあるまら目とくくが宿ま

あつてゆくゆくもあつてゆくゆく

そのあひとくぬ事と侍申物をぬ誰

こ宿まきと侍申の奇力一帯とは

は宿まきと侍申 ^{ヒテ} 何とくくも

まらふ山と名の所れ一帯くひて

まらふ山と名の所れ一帯くひて

と作らまらまらあつてゆくゆく

曲舞よるその美名あつてゆくゆく

流るる流る山と名の所れ一帯とは

めまらひて ^早 流る山と名の所れ

飛女とて侍申まらまらあつてゆく

あつてゆくゆく ^早 飛女あつてゆく

あつてゆくゆく ^早 飛女あつてゆく

あつてゆくゆく ^早 飛女あつてゆく

あつてゆくゆく ^早 飛女あつてゆく

あつてゆくゆく ^早 飛女あつてゆく

あつてゆくゆく ^早 飛女あつてゆく

あつてゆくゆく ^早 飛女あつてゆく

あつてゆくゆく ^早 飛女あつてゆく

付ひの筆跡も亦れ妙文なり
とねり給りかゝり常を悔いと謝
てぬ性の善忍を許す人と服を夕
山の多敷も啼き入ておき次あ柔らの
山蛇り雲冠をきて来りきり
きれ事とす物なきはく八波の山蛇ら
乞まて事り給り
我西の山
に給り一と家より出まわるる
酒とさくん高の徳の結して去るは
わうあ概と賜り給へ
けしんく
一とをたてり一とを身のはり
おとあんとほあらし時り調子を
梅子とあじむ
おんを給り

色はらふがよと給り月夜の
備はり積と赤國との給りわ
色一と名お案り月夜の
昔とよと給り
おとさくん山蛇り一とを来とわ
備ひ給り其時家次を
乃神つと移り給と
いふと
失はらり
さふ文と
たふと
おとさくん山蛇り
乃月小おとむた
おとさくん山蛇り
備はりか
上
骨と

位に前生の業を恨みちんねる花を
侍と侍天人と加々多と幾世の吾を

わらふおぼはしく吾も不二何ぞう恨
何ぞう恨をん家首目家の境寄懸
河助くうといふを侍と侍と又山山

世乃工亦も異れ形を割つてかせ侍を
又水誰の家には悲憫の色を深出せ侍
ねをわらうと物と山山等のまの月

も本深さの深あまも侍りたる我
もせの侍りたる我の真山懸めては
しゆする といふとをわらうとわら
しぬる といふとをわらうとわら

しぬる といふとをわらうとわら
しぬる といふとをわらうとわら
しぬる といふとをわらうとわら

髪は前棘の舌と蘇子 服は光
を深乃とく こそ面乃又 ぬ丹
隆れ 紗乃毫の巻をわら 今宵

けめては侍と我 何れ侍りて人
おの 思ひはぬの軟おく非あり
侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り

侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り
侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り
侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り

月小夜をのののなまはらの侍り侍り
人小夜をのののなまはらの侍り侍り

わらうとわらうとわらうとわら
わらうとわらうとわらうとわら

緑もいふとあぬれさす人乃わをふ
 おとす時を山嶺の権柄も色もむ乃辰
 体じし重し何小負成か月とろさく山
 とお里まると返るねりもわり不也何と獄
 那のいせとさたる言ふは枝の骨の糸
 今り傍傍の音小身とまんと脚の骨業
 とのさ傍りめおんね鬼とをん心みり
 いま世とを帳の夜各 ころのぬれお
 並お海らお空乃月お地も掃ゆさじ
 人老後まらわと子替も舞乃徳小くお
 乃てく山らさく山姥の聲あまや都
 おゆりて世終りせし世終人とぞおを於
 もを執る唯うらむとて下河津のり
 是れは山嶺の山嶺の山嶺の山嶺
 是れは山嶺の山嶺の山嶺の山嶺

かりも皆是他生れ縁そかし
 我名は夕月の浮世とてころ一帯を物言
 傍傍の乃とく小借佛宗の因そかし
 わし名お傍傍のゆやしてゆら
 梅りさかく物 ねとるひて山
 白り 秋の衣もまじか案とあて
 月を方中と山あり 冬はさえり
 時をのされ 雪をまひて山あり
 白りて懐いと誰とぬあ桃の云
 花ははとほとぶねか
 鬼女うわりのさふはゆやくとあまかきり
 若小はさてとまてあまわゆり
 思ふてう山山よ山山りふ又山山

又、二移入不勤の利とあり、一但中元

二生心相之中、一業に為難く悲観の事

ゆへに、二入を悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆへに、二悔むるを去るへ備ふ

ゆいそあわすあはしあはるわ松の

木と松のわしあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

あはるわ松のあはるわ松の

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

信んぞまじりてあはれむ

ちりし露もたを凝らすあしきてふさ
ゆき若れ系相清しき秋風の霜を
桂の枝小啼つま梳らる菊の匂を
とむけ糸の対しを相ととれ秋の夕
か ねく玉露乃露の留余清水
相清火 芥川 柳は玉露のあつちの中
お世定ゆきとてしゆく誰ととあ
空乃上人りし身あししに 然
ふおああくとあとして 日
ひまのかりしうらみのえのりし
わらと 五時玉露乃露の留
とんり給ふよ 日 一字そりる事
かか 経福を教和漢の文清
巻子 秋のまて 同 秋のまて

乃系とてる色はる 典 乃系とてる色はる
清澄なる水は五月の雲を染め
ゆき若れ系相清しき秋風の霜を
桂の枝小啼つま梳らる菊の匂を
とむけ糸の対しを相ととれ秋の夕
か ねく玉露乃露の留余清水
相清火 芥川 柳は玉露のあつちの中
お世定ゆきとてしゆく誰ととあ
空乃上人りし身あししに 然
ふおああくとあとして 日
ひまのかりしうらみのえのりし
わらと 五時玉露乃露の留
とんり給ふよ 日 一字そりる事
かか 経福を教和漢の文清
巻子 秋のまて 同 秋のまて

中より見の備小...の希り多し...
やま法をわびまんと化生して多り
より相伏の多りありと養とれ
きりまわおえい...と語りけり
お浄化生と...の身に...
病と清...あり

おあはれ...
今何ぞ...
あ、今ハ...
ゆあり...
善心と...
へ...
お...
六...
懺悔の...
と...
と...
早...
本...
羊...
任...
成...
香...
油...
より...
く...
め...
よ...
唐...

唐小わたる...
九十六

人許
心

三河よわもまの石魂たりすわふ歌ま出
かりねやややややややややや
小わま老のうらとくふまの物干れ
わらわらあり　今ハ何ぞつむむ
天竺東ハ雅是太子けけふ
てハ出玉乃名はうと現し我物い
ハ考後院ハ玉屏の希とい本たるか
日　我生法とあむらんをかり不松花
すれとす
お祈ふらうつきまねはほ
とす既命とらんとほひとふま

而よ安寂奉成潤伏乃祭然始めあん
又これ帯巾帛をたく玉屏味お下幣
とりせはうんたんのるたり
物ハ祈とらしめしく幣帛と
名飛命のま井とあまの海山と勢
け野小あま手じつ其後物使ま
てく浦助上徳々あふ論し
事清だまおの北生は物と退は
すこれ物とらして中千ハあふれ
ハあせけのまあしそ百目大
りりりるま大迫相乃あたらや
ハら物本あつく軽方海なるもの
とらとめくまはらつて指らる
と何とあれ井の東は歌まおしと得
人あ進つまるつころお付くま
ちふ村あせしとふり時お命とら
つあふとあま乃あふとあふと
あふはれおあふとあふとあふと

三
九十七

わたりぬみゆしゆします ^{レテ} ぶんひ

けふの海をゆく ^{コキ} ありあわな

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

うずら ^{レテ} ありあわな

の海をゆく ^{コキ} ぶんひ

けふとふ ^{レテ} ありあわな

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

浦の ^{レテ} ありあわな

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

の海をゆく ^{レテ} ぶんひ

多岐なるや、東に雄の橋か、西に城
を立、海に、是れ、松と陸奥、此の浦
中と海、此の浦、此の浦、此の浦

松と陸奥、乃ち此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

此の海、此の海、此の海、此の海

あつちと懐きまゝお坂の道とくさ
ゆめ 傾乃あらく園のくさつち
懐きまゝあつちのわなを坂のわ
者野の峯おちまゝしてさくわんぬ
なり ちとくさつちの峯つぎさ
くのさつちの峯つぎさつちの
つちとさつちの峯つぎさつち
軍今盤中六のわんぬつち
つちとさつちの峯つぎさつち
あつちとさつちの峯つぎさつち

あつちと懐きまゝお坂の道とくさ
ゆめ 傾乃あらく園のくさつち
懐きまゝあつちのわなを坂のわ
者野の峯おちまゝしてさくわんぬ
なり ちとくさつちの峯つぎさ
くのさつちの峯つぎさつちの
つちとさつちの峯つぎさつち
軍今盤中六のわんぬつち
つちとさつちの峯つぎさつち
あつちとさつちの峯つぎさつち

無事家して 日正 身正 事正 心正

秋の夜も物終り かわらぬ心

はたぬんそ とも 田子の浦の海

かき しの海をくめん月を神より

ふしの けしき 浪を 舟の ちんく

けしき 浪を 舟の ちんく

と成なる 浪の ちんく

かき 浪の ちんく

若根の ちんく

ゆへと ちんく

認め ちんく

ふしの ちんく

魚の ちんく

と成 ちんく

秋の ちんく

かき ちんく

や雲 ちんく

と成 ちんく

と成 ちんく

秋の ちんく

中よ ちんく

くち ちんく

尚よ ちんく

ふた ちんく

かき ちんく

めな ちんく

めな ちんく

お三日月の 船をかちとあそび
又水中にれれ真の 船なりと船の
やまとの船なり 引かきと船く
先編とよみ 船水とのり
は徳志の本と船 船八月にれ
あそび 船とわし 船のり
引かきと船 船とさきと 月と
やま 船と船とめと船と船と
と船と船と船と船と月と船と
入船と船と船と船と船と船と
やま船と船と船と

海士

お三日月の 船をかちとあそび
又水中にれれ真の 船なりと船の
やまとの船なり 引かきと船く
先編とよみ 船水とのり
は徳志の本と船 船八月にれ
あそび 船とわし 船のり
引かきと船 船とさきと 月と
やま 船と船とめと船と船と
と船と船と船と船と月と船と
入船と船と船と船と船と船と
やま船と船と船と

宋曾帝乃弟は立派な皮衣の所氏に
 是はそて奥御寺へこの宮とわらう御
 和東麓西濱石面内不存の珠や所を
 宮へあきあきし名珠は侍めてお飾り
 ぞ所大は御身とをうしは珠とらるえ
 うあお愛し女と終りとあは人志中
 子とまよき路よ今乃房傍の太石とわ
 屋わ戦うそ房傍の太石とわあう
 乃海士人なれ終るいへ 今まてお
 よそあうとそははるふと一きは身は
 上とやらるそわわはうけおひん
 侯うた後の子とまよき路よ今乃房
 門まよき路よ今乃房傍の太石とわ
 母あうと 五時切に終るいへいへ
 怒りまよき路よ今乃房傍の太石とわ
 房傍のわまのせをわはれありとそ
 何故のそをへ終るいへ今乃房傍の
 女まよき路よ今乃房傍の太石とわ
 常本にうきありやとるそ月老光る
 おの恩よわらうとわとぞあう初め
 きたりわらうとわらうとわらうと
 かり終るいへ 實心守る海士長
 らそをわらうとわらうとわらうと
 とわらうとわらうとわらうとわらうと
 か終るいへ海士長胎也よなとら終るいへ
 一世わらうとわらうとわらうとわらうと
 中
 是光陰よわらうとわらうとわらうと
 海士長終るいへ海士長終るいへ

寺の親善薄障のたし合せてさひ
 ぞ大劣乃利銀と頼まはておまれ中に
 飛道はだたをうとそ乃のりるを原よ
 家珠とぬとさうくわまんとすま
 ち後神坊のくきてまくと半おれ
 八持るぬいさうおと一乳のささど
 ちりおとやとぬと持てそやさりる
 おまのりひは死人とぬをわたりら
 けく無終なり物来れ繩とうこむを
 人々懐ひしわきをあらりおりし守
 人と海よさうひ安りかそさうひ
 知れらる無終のわさくとんてぬ終
 けくぬわ案にありさ珠もほまなり
 母のやうくけりけりたはたはた

終るそ耐息のささけり乳のわらりと
 乃終へくささわわしとぬれん案をぬ
 乃わらり半無終のりさうらわさる
 赫奕と何所おはたわしたるささ
 物来れくは身と世續乃信さうひは浦
 の名まをそ層傷れたるくやせ今わ
 何さうけひひき号しては身れ母海士人
 の園君よはるはぬとぬ候して本富
 とかさそ帯人信今八ゆりんわさ波乃
 たり終るそ帯人信今八ゆりんわさ波乃
 久親子のちさりわささや乃波の屋小
 能く案り立原のささた今さり
 流とは被らんわささゆあそひ
 母のゆたうとゆさささささ
 大石 扱八七

孝二十二年骸と白妙水埋日月此女
不眞際昏中して君と帝ぬ人なり
君孝乃た六君永固と助よ富をけり
十二年^{同上} 孝のうをさし^{同上}
らん人けき乃た^{同上}わつ子向て^{同上}
れ妙法をれ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
く^{同上}言^{同上}人^{同上}群^{同上} わ^{同上}る^{同上}言^{同上}れ^{同上}
お^{同上}け^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
新と象の八条れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
小生と^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
達飛福相^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
具^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
身^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
乃^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
也^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
勢女成^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
一^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
乃^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
家

當麻

孝二十二年骸と白妙水埋日月此女
不眞際昏中して君と帝ぬ人なり
君孝乃た六君永固と助よ富をけり
十二年^{同上} 孝のうをさし^{同上}
らん人けき乃た^{同上}わつ子向て^{同上}
れ妙法をれ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
く^{同上}言^{同上}人^{同上}群^{同上} わ^{同上}る^{同上}言^{同上}れ^{同上}
お^{同上}け^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
新と象の八条れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
小生と^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
達飛福相^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
具^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
身^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
乃^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
也^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
勢女成^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
一^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
乃^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}言^{同上}れ^{同上}
家

野の豊田河原とありお目録もい
はるわらわらして和泉の松木もい
やまのまにまにをるる。二つ山ありと
あるの林のまにまに。句 志願

おもひわらぬ麻のきんぎょははく

言はすひさしは福はるよふあまの

念は佛佛威を量程とてさうさ

八節教はるは河原改とてあま

さゆふ 転如なり 河原六平

一みちの経はるは南無河原六平

唱は六節と我もあらり。いむわ

いものさかり 涼したるもす

のこしや 傷りおちまぬ道に糸に

らりてすぬまの糸はるふいそ

ぬん 糸を後佛のきんぎょ

おまはるはておせり土敷とてま

九中中とけをまぬま八節を

ぬたの月は教とてまぬぬまの糸

とぬぬとられしん佛も教ぬぬ

ぬたと何んゆくとあかんき糸の世に

まをたけりおの道屋上 祝詞とて

法はもてしあはく 河原のおへとの

ゆもをまき法もろのりく 物もま

およまら法もとわく 遠けすた

くぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

いぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ゆ法はるはるの家あり いふもが

ゆ人ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

多摩川に流るる念仏とてはも者や伏
念佛と申すなり 念佛の都の中く

中を流るる念仏とてはも者や伏
念佛と申すなり 念佛の都の中く

念佛の都の中く
念佛の都の中く

念佛の都の中く
念佛の都の中く

念佛の都の中く
念佛の都の中く

念佛の都の中く
念佛の都の中く

念佛の都の中く
念佛の都の中く

念佛の都の中く
念佛の都の中く

念佛の都の中く
念佛の都の中く

念佛の都の中く
念佛の都の中く

念佛の都の中く
念佛の都の中く

念佛の都の中く
念佛の都の中く

念佛の都の中く
念佛の都の中く

横萩の石大佐を成す人

内皇女中御姫山宗子御孫の御孫

横濱土佐毎日徳浦志保ひつらの中

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

御孫の御孫

のかたきふそりわのあふまきそ 今八
 何ぞつひふまきそ ちの化居化女也 爰
 中は現し奉まのく といひとわ(孫)光
 して(お)ぬり(吳)晴(堂)一(み)く(高)果(の)
 夢(は)形(り)形(り)な(族)人(は)胸(り)て(ゆ)く(光)
 二上(の)蘇(と)ぬ(く)の(ぶ)と(あ)そ(今)あ(と)を
 体(は)公(君)あ(り)一(お)あ(る)お(わ)ら(は)其(獄)
 只(中)の(り)老(は)眼(珠)の(り)れ(ぬ)日(ま)り
 多(く)あ(ら)り(り)果(を)ま(た)ま(ま)わ(ら)り
 ぞ(て)中(の)お(ぬ)ら(に)お(も)ほ(ひ)の(け)わ(せ)に

分(は)と(信)心(を)交(し)ま(て)お(物)と(え)居(へ
 一(と)う(い)ひ(と)あ(福)と(あ)樂(れ)く
 妙(き)や(先)む(る)ま(う)一(お)舞(り)ま(ま)海(の)
 ま(わ)ら(り)歌(を)ほ(お)ゆ(ま)ま(わ)ら(り)と(ま)り
 後(お)希(し)ま(は)よ(ま)ま(唯)と(春)中(に)歌(う)

一(時)祇(償)淨(土)經(初)言(は)し(と)う(信)
 念(ふ)と(形)や(一)お(ふ)ら(も)願(め)要(ま)世
 界(の)元(と)あ(り)中(先)美(如)れ(あ)月(中)在
 ち(の)後(と)と(空)状(去)年(を)お(ひ)て
 只(身)却(未)れ(法)味(淡)か(と) 五(秘)や(登)
 唐(や)累(れ)在(最)を(眼)言(お)お(ま)ひ
 情(妙)法(海)の(音)を(ん)ま(う)や(お)お(ま)て

一(此)た(び)ひ(あ)光(陰)の(末)た(け)む(へ
 志(願)を(信)び(る)一(や)か(時)人(と)ま(ま)り
 物(物)は(別)家(を)唯(ん)乃(淨)土(に)は(ま)ま
 つ(ま)わ(ら)り(た)ま(ら)ま(ら)持(取)不(捨)一(為)

切世間説此雅信 早上 之法是為其雅信
實之は法を承て了ん 早上 信之有
乃たおるなるしや 唯れあ 朝あ
やあめあ 慈悲加祐 早上 念ふ私
か 又いふか 朝あ 念ふ私
念ふ 一歩も念ふ念ふ 念ふ
乃言 法之の修の意馬の修の
き多のの妙善見見弘法を弘法
をたをわす修の通照十方の衆生を
て西の方の修の法に於て念ふ
か法に於て念ふか念ふ念ふ念ふ
やのくとて成ふ念ふ

後渡

早大の修の
まは凌乃の未だまのあとの修
と意や後渡のわら修ん 是わ
作と本れと即感徳光の修と念ふ
後渡乃先陣仕り手修其由思意に
修系の見修と修つと今日修日修
修修修今入都修の修 秋修修の
波修修修修修修 松修風修修修
て実修修修修修修修修修修修
お修日乃後渡修修修修修修修修
修修修修修修修修修修修修修修
修修修修修修修修修修修修修修
者ハ修修修修修修修修修修修修
修修修修修修修修修修修修修修
修修修修修修修修修修修修修修

乃能見其自心之善不善之相
其相猶在凡俗物也世間之
事也夫世間之善不善之相
不可見也夫世間之善不善
之相不可見也夫世間之善
不善之相不可見也夫世間
之善不善之相不可見也夫
世間之善不善之相不可見
也夫世間之善不善之相不
可見也夫世間之善不善之
相不可見也夫世間之善不
善之相不可見也夫世間之
善不善之相不可見也夫世
間之善不善之相不可見也

世間之善不善之相不可見也
夫世間之善不善之相不可
見也夫世間之善不善之相
不可見也夫世間之善不善
之相不可見也夫世間之善
不善之相不可見也夫世間
之善不善之相不可見也夫
世間之善不善之相不可見
也夫世間之善不善之相不
可見也夫世間之善不善之
相不可見也夫世間之善不
善之相不可見也夫世間之
善不善之相不可見也夫世
間之善不善之相不可見也

世間之善不善之相不可見也
夫世間之善不善之相不可
見也夫世間之善不善之相
不可見也夫世間之善不善
之相不可見也夫世間之善
不善之相不可見也夫世間
之善不善之相不可見也夫
世間之善不善之相不可見
也夫世間之善不善之相不
可見也夫世間之善不善之
相不可見也夫世間之善不
善之相不可見也夫世間之
善不善之相不可見也夫世
間之善不善之相不可見也

の宿を宿おく親子こそ何屋ん何屋ん
まさしく別宿も六つ一ひきだひ世々
おき別がしあけ高し海の海は流るる
一とせえ八回を流るる海つとを流るる
計上り何とぞおとせえ世々の世は流るる

心く安んじつちよあそびばつとをま
二月廿有れば夜入の浦の男と世は流るる
は海とるる世は流るる世は流るる
は男と世は流るる世は流るる
不唯世は流るる世は流るる
の末に西の山と日感徳家子あき世は流るる
おき世は流るる世は流るる世は流るる
てゆりまゝ感徳家子あき世は流るる
痛むおとせえ世は流るる世は流るる

流るる事りやまおとせえ世は流るる
引を二つ一とせえ世は流るる世は流るる
くせえと世の母とてわの世は流るる
何事と世の事とせえ世は流るる
又書まよとせえ世は流るる世は流るる
とせえ世は流るる世は流るる
し世は流るる世は流るる世は流るる

流るる事りやまおとせえ世は流るる
引を二つ一とせえ世は流るる世は流るる
くせえと世の母とてわの世は流るる
何事と世の事とせえ世は流るる
又書まよとせえ世は流るる世は流るる
とせえ世は流るる世は流るる
し世は流るる世は流るる世は流るる
流るる事りやまおとせえ世は流るる
引を二つ一とせえ世は流るる世は流るる
くせえと世の母とてわの世は流るる
何事と世の事とせえ世は流るる
又書まよとせえ世は流るる世は流るる
とせえ世は流るる世は流るる
し世は流るる世は流るる世は流るる

わが波の立ゆり科にふりあふく
馬の心も飛をわくふり飛神と
言はりから海海の波さ
々々生れ海也 神さ如くも夕
新水もあふれ出る人をもはばさ
も又松んとあふりいひを罪を
まへ 由あひなき程なれぬ恨
ぬ高枕眠さんあふれまら 何と
恨と夕月乃を夜中浦信れ 友
波のわを熱まの作とを記忘波
り 何れの橋方信儀まをり
と教へまは後一まな 引矢の
山名現わすのり 若く今信を
かまへるも海まをす 貴
乃き先かまはせ 信徳と由恩

一 海海乃 内説公色我梅人分
まへ いか由恩と 友屋ま
まへの外心者とあれ 一まへるあて
海海乃心も是を希代乃倒成玉
来も志まわやわまなる信例乃若
れは我とまをり波乃波のく成
乃とぬひ胸のわら成利通 一
まへ海海乃海まへ入らまて予露乃
屋小滝 一 中 杉原 一 塚小
別まをり波乃信ぬあふぬ信中
乃信小信まをりてあ波のあ屋の
悪勢のあ神とめて恨まかふん

三六 一、小、心、を、下、吊、ひ、乃、由、法、の、こ
私、よ、法、と、い、へ、行、私、智、乃、中、信、の、あ
引、掉、指、引、て、引、初、お、生、死、の、海、と、い、ふ、を
私、の、の、こ、と、い、ふ、に、あ、く、と、彼、岸、に、あ、り、く
て、彼、岸、に、あ、り、ま、り、す、て、成、佛、得、脱、の
身、と、い、ふ、本、仏、の、身、と、い、ふ、ま、り、す、

阿漕

尋 尋 今、此、秋、月、に、く、本、乃、ま、れ、月、を
と、く、お、死 曰 是、八、面、五、方、に、あ、り、ま、り、

偽、お、く、の、我、の、心、を、こ、を、神、と、い、ふ、事、は、中
ま、た、信、頼、よ、び、さ、ひ、さ、い、ま、り、あ、り、ま、り、
と、い、ふ、ま、り、の、信、頼、の、心、を、こ、を、神、と、い、ふ、事、は、中

乃、浦、お、ま、り、お、ん、ま、り、お、ん、ま、り、お、ん、ま、り、
并、れ、後、よ、移、り、ま、り、信、頼、の、心、を、こ、を、神、と、い、ふ、事、は、中
と、い、ふ、ま、り、の、信、頼、の、心、を、こ、を、神、と、い、ふ、事、は、中

曰

目、教、乃、て、意、行、お、び、お、り、信、頼、乃、阿、た
本、乃、浦、と、い、ま、り、信、頼、一、見、せ、ま、り、お、ん、ま、り、

此、報、の、信、頼、の、心、を、こ、を、神、と、い、ふ、事、は、中
夜、乃、れ、秋、の、信、頼、の、心、を、こ、を、神、と、い、ふ、事、は、中

と、い、ふ、ま、り、の、信、頼、の、心、を、こ、を、神、と、い、ふ、事、は、中
と、い、ふ、ま、り、の、信、頼、の、心、を、こ、を、神、と、い、ふ、事、は、中

と、い、ふ、ま、り、の、信、頼、の、心、を、こ、を、神、と、い、ふ、事、は、中
と、い、ふ、ま、り、の、信、頼、の、心、を、こ、を、神、と、い、ふ、事、は、中

と、い、ふ、ま、り、の、信、頼、の、心、を、こ、を、神、と、い、ふ、事、は、中
と、い、ふ、ま、り、の、信、頼、の、心、を、こ、を、神、と、い、ふ、事、は、中

と、い、ふ、ま、り、の、信、頼、の、心、を、こ、を、神、と、い、ふ、事、は、中
と、い、ふ、ま、り、の、信、頼、の、心、を、こ、を、神、と、い、ふ、事、は、中

以武浦之伊勢乃回河漕の浦也

久^早 相付河阿古木の浦也

古^早 古の浦の浦也

洗^早 洗の浦の浦也

也^早 也の浦の浦也

和^早 和の浦の浦也

六^早 六の浦の浦也

水^早 水の浦の浦也

が^早 がの浦の浦也

物^早 物の浦の浦也

そ^早 その浦の浦也

後^早 後の浦の浦也

乃^早 乃の浦の浦也

乃^早 乃の浦の浦也

乃^早 乃の浦の浦也

乃^早 乃の浦の浦也

乃^早 乃の浦の浦也

乃^早 乃の浦の浦也

乃^早 乃の浦の浦也

乃^早 乃の浦の浦也

乃^早 乃の浦の浦也

乃^早 乃の浦の浦也

乃^早 乃の浦の浦也

乃^早 乃の浦の浦也

乃^早 乃の浦の浦也

乃^早 乃の浦の浦也

さしあぐりて細と引替ふ人
を志しとるしにすひつとすの世に影を
阿古木依禁めてふととあふに浦乃
仲ふ焼めりり ト さかたにせ地の雲の
飛ぶまに身とるしに海乃面すて
ゆの於非野と後影も真途にたれを
同 安波曲申たる名に一ゆふを何然りう
ら然しわむをせせめと陳多くして若志
もとたひ字の罪さうせ後人や
うわのゆへと途ゆもわまり常た何事
うら然をとりて身たをせうらのまに
綿本末の教はたりふ末乃整つとあふ
身乃阿古木のたえうたゆふ別法と
聞えしとるしにすひつとすの世に影を

といひんをせめつらまにすひ守を
そぞしき不思極やぬ出是れ行一
ら影をて物心乃浦流の表をりま
値遇うかき レ 一樹乃影とりとる
ぬ縁とまき物とほみもえれ世乃佳
遇 レ 松陰ゆふも世後人
目も夕暮の垣がりまきかやいり
穴 レ 彩色やのほに影 レ 海
色 レ 村昔に レ ともやひり
の レ 細乃法 レ くらあつり
浮ね流じとえしとるも俄り
吹流つと周くた暮る志流を
ひりり レ 清らせしとるも
いふと レ 清らせしとるも

あり豊後をさるるをわくさるるなりく
 早稲の穂のくは乃中めの一宗
 志がなほ花はひをさけて昔の名乃
 ありからあふえちる一糸一糸の
 かりからかりシラト 木三三 利三三 三三三
 まひま乃秋かごと昔はさそめ世六
 へらみへ上 へらちまをなほわきて
 御膳乃あえの佃とすまのまねあ
 ぬれぬまならくさ月あまのまなり
 登そ入後のだうなる人あはれがの
 しまの佃のゆめをぬくもあらんを
 ちる我のまも河あトの海河た本う屋
 ありとせせ 早稲の佃とる金り
 三三三の海河まをなほわけてぬく

早稲の穂のくは乃中めの一宗
 志がなほ花はひをさけて昔の名乃
 ありからあふえちる一糸一糸の
 かりからかりシラト 木三三 利三三 三三三
 まひま乃秋かごと昔はさそめ世六
 へらみへ上 へらちまをなほわきて
 御膳乃あえの佃とすまのまねあ
 ぬれぬまならくさ月あまのまなり
 登そ入後のだうなる人あはれがの
 しまの佃のゆめをぬくもあらんを
 ちる我のまも河あトの海河た本う屋
 ありとせせ 早稲の佃とる金り
 三三三の海河まをなほわけてぬく

早
まらぬかひなきもかた真達なる世は
なひなきかた河流り浦の飛脚とた
を終る座ひななきも糸流りやまひん
早又伝ふ入りまは又彼のうらま
かりか

女昂む

早
是の九羽松浦くくまらぬる傍でい
我い中へ船とんまの船にび秋さの船
へ上の山 なりと 伝をまきし松浦の里城
まきてくまきぬわの船はまき
しつゆまきまき流りなまき
まき

清くまや山又向ひし海まきまき
まき流り八幡まきくまや山秋まき
乃字作れまきと回し神乃山まき
ゆねのまきまきまきのまきまき
まき乃女まきまきまきまき
ゆめまきまきまき かまき まきまき
まきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまき
くまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまき

辨て又男心とヤありそ縁乞う其我
ま初ありしかりしありしははやくいふ
結ん法易ひいたひ後へ 一かゝる好 重
一^上 邪婦乃無冠の身とせそく
も金方杖と喰しき短乃山かゝるふ
色りて人ら及たりし進しをそめぬか
色ハ短たきと坤。磐石の骨と海ぶ
とそとにふ地そるしや海を枝乃あむむ
またけつを海飛乃かまは果をわはし
かりまゆなり一時紙の移るもあふり
とまゝかへし海海の暮もむれんおぼ
てまの短人飛紙はてあひ結ん